



パターン・ランゲージ:C1
「WE」で語る

「あなた」と「私」ではなく「私たち」でいく。違う組織・地域のことは他人事としてとらえてしまい、一体感がうまくいかない。そこで、自分だけでなく、相手を含む大きな主題で捉え、語るようにする。



パターン・ランゲージ:core3
共に汗かく伴走者

同じ方向を目指して、最後まで一緒に走りきる。自分だけでは達成できないことを、周りの人と一緒に成し遂げたい。



島根県におけるコーディネーターの主な役割,4
新たな人の流れと
多様性ある教育環境の創出

例) 県外や海外からの生徒募集、留学生受け入れ、寮・下宿等の整備、ホームステイ先の調整など。



島根県におけるコーディネーターの主な役割,2
地域社会に開かれた
カリキュラムの推進

例) 授業・生徒会・部活動等の地域課題解決型学習や海外視察等の企画・調整など。



パターン・ランゲージ:N
ねばれる仲間

地域外にいる人も含めて、いく仲間を増やしたい。3段階でやる段階ではやりがいがあっても、実際にやるといって、実もしっかり伝えるようにする。



島根県におけるコーディネーターの主な役割,1
高校と地域社会(行政、企業、NPO等)
の協働体制の構築

例) 協働の組織体制づくり、共通ビジョン・事業計画の策定、協議会の運営など。



しまね
高校魅力化参考書

高校魅力化に取り組む各現場に蓄積されてきた知見や経験を集めた参考書です。あくまで「参考書」ですので、この冊子をもとに、各現場で議論を尽くし実践するための手がかりに。

社会に開かれた学校づくりを推進する専門人材

高校魅力化コーディネーター というしごと。

発行:2018年10月

問い合わせ先(編集・発行)

島根県教育魅力化推進チーム
(事務局:島根県教育庁教育指導課地域教育推進室)
Tel.0852-22-6165 Mail. tiikikyoku@pref.shimane.lg.jp

一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム
Tel.0852-61-8866 Mail. info@c-platform.or.jp
http://c-platform.or.jp

コーディネーターに関わる
冊子・テキストについては以下があります。

- しまね高校魅力化参考書
- 学校と地域をつなぐパターン・ランゲージ
-社会に開かれた学校をつくる旅-

詳しくは(一財)地域・教育魅力化プラットフォームまでお問い合わせください。



パターン・ランゲージ:B8
ちがうことの意味

経験してきたことの違いや立場の違いをあえて活かす。先生や行政職員と異なる視点を持ち、違う立場で存在することの意味を自覚し、違いを活かすための行動も大切にする。



パターン・ランゲージ:C7
未来への対話

先生や行政の人、地域の人と一緒に新しいことに取り組むために、定期的に熱く語り合う機会をつくり、成功イメージ(実現したい姿とそこまでのプロセス)を共有する。



島根県におけるコーディネーターの主な役割,3
地域社会での
学習環境・学習機会の整備

例) 公営塾など学校外の学習環境の整備、地域活動・社会体験・海外留学の支援など。



学校と地域をつなぐパターン・ランゲージ
-社会に開かれた学校をつくる旅-

学校・地域で「コーディネーター」の役割を担う人が、現場で一步踏み出すための実践のヒント集です。島根県内のコーディネーターの実際の経験則をもとにつくられていますが、多くの人が実践できるように抽象化してあります。



パターン・ランゲージ:A
リスペクトから

先生や行政の人、地域の... きないことがある。相手... 考や言動にはそこにいた... 相手の背景に目を向けて...



これから訪れる社会は、VUCA(ブーカ)と言われます。

Volatility(変動性・不安定さ)、Uncertainty(不確実性・不確定さ)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性・不明確さ)を指し、さまざまな面で変化が激しく、予測できない社会が訪れると言われてています。

そんな世界では、『教育』はどうあるべきでしょうか。

昨今、「社会に開かれた教育課程」「学校を核とした地域創生」など、学校と地域の連携・協働の必要性・重要性が強く指摘されています。では、そんなこれからの教育をつかっていくには、どんな役割・機能があるのでしょうか。

超課題先進地域、統廃合の危機に面した島根県の離島・中山間地域で、社会・地域に開かれた魅力ある教育課程を作っていくために 必要かつ重要とされたのは、「コーディネーター」という存在でした。

コーディネーターとは学校と地域を、生徒や先生と地域をつなぐ、縁結び人。とはいえ、「コーディネーター」の在り方は1つではありません。学校や地域によって役割は多様に存在します。

この冊子では、実際に教育の現場で働く『高校魅力化コーディネーター』取材し、それぞれの動きの中から、コーディネーターの役割・機能・可能性についてまとめています。

この冊子により、「コーディネーター」の存在が確立され、これからの「コーディネーター」の背中を押すことができればと願っています。

社会に開かれた学校づくりを推進する専門人材

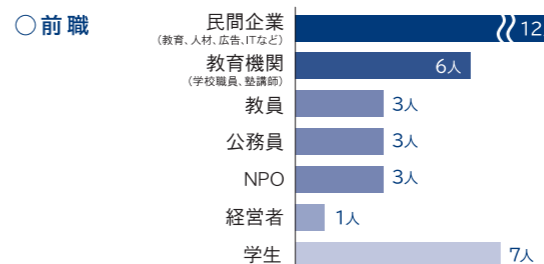
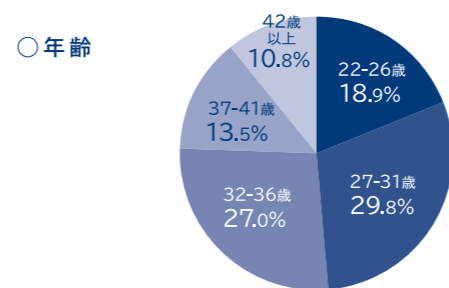
高校魅力化コーディネーター

島根県におけるコーディネーターの主な役割

1. 高校と地域社会(行政、企業、NPO等)の協働体制の構築
例)協働の組織体制づくり
共通ビジョン・事業計画の策定、協議会の運営など
2. 地域社会に開かれたカリキュラムの推進
例)授業・生徒会・部活動等の地域課題解決型学習や海外巡検等の企画・調整など
3. 地域社会での学習環境・学習機会の整備
例)公営塾など学校外の学習環境の整備、地域活動・社会体験・海外留学の支援など
4. 新たな人の流れと多様性ある教育環境の創出
例)県外や海外からの生徒募集、留学生受け入れ、寮・下宿等の整備、ホームステイ先の調整など
5. 魅力ある高校づくりに向けた社会資源の確保
例)外部資金の獲得、大学・民間企業等との提携、外部人材の確保、県・国等への提案・折衝など



島根県高校魅力化コーディネーターdata (2018年10月現在)



地域と学校の協働を引き出す 仕掛け人



大野佳祐 隠岐島前
教育魅力化プロジェクト
魅力化コーディネーター
ono keisuke

1979年東京生まれサッカー育ち。大学卒業後、早稲田大学に職員として入職。競争的資金獲得などで大学のグローバル化を推進。2010年にはプライベートでバングラデシュに180人が学ぶ小学校を建設し、現在も運営に関わる。2014年には仕事を辞めて海士町に移住し、隠岐島前高校魅力化プロジェクトに参画。



高校魅力化プロジェクトの海外展開にも関わる。ブータン王国訪問時には、教育省幹部と英語で意見交換をし、大きな共感を得た。

時にはプロジェクトリーダーとして、意思を持って先頭に立つべき時もある。グリーゾーンにも飛び込む。

よくあるスケジュール

6	8	9:30	12	13	14	15	17	18	22	23
起床	メールチェック	役場 資料作成	高校 課題解決型学習授業	視察対応 先生方との打合せ 昼食(生徒保護者などが入ることも)	全国各地からの スタッフ打合せ	公営塾 職員会議に出席	高校 職員会議に出席	視察団との懇親会 管理職との打合せ	翌日準備	就寝



高校だけでなく、役場にも出勤。どこにでも所属している意識を持ち、今いる場所に合わせる立ち振る舞いを変え、仲間を増やしていく。

生徒・児童との対話も行う。時には、小中学校にも出向き、授業をすることも。

人を巻き込み、道を切り拓く力

#プロジェクトリーダー #プロデューサー

大野さんのコーディネーターとしての初仕事は「スーパーグローバルハイスクール」の申請。学校内では「無理でしょ」という雰囲気もあったが、先生方の協力を引き出し、指定を受け資金を獲得。その後、ロシア、ブータンなどとの繋がりをつくり、生徒を送り出し、留学生の受け入れを進めるなどしている。他にも、学校や地域の課題感に応じ、企業・大学などを含む多様な人々を次々に島の教育に巻き込んでいる。「コーディネーターにはプロデューサーシップの強い仕事と、コーディネーターシップの強い仕事がある。」と大野さんは語る。大野さんが担うのは前者。

そんな大野さんが意識しているのは「学校の中の非常識」であり続けること。学校や魅力化プロジェクトが進化し続けていくために、「できないかも」と思われることにも率先して挑戦し、「もしかしたらできるかも」に変えていく。

その動きは、学校内にとどまらない。時には町村長や教育長と協議をし、県の教育委員会や文科省との調整にも動く。魅力化プロジェクトの今後の方針を決める次期魅力化構想の策定では、地域や学校のニーズを汲み取り、方向性をまとめていく中心的な役割を担っている。

「構想づくりに関わった人たちの願いを実現したい」と軽やかに話す大野さんは垣根を越えた関係者の声を引き出し、情報を提供し、実現の方法を共に考えながら、前へ前へと進んでいく。

その問いが人を動かす

#信頼関係 #関わりしろ

「多少の無理でも大野が言うならやってみよう、と言ってくれる関係性が理想です」、大野さんは学校や地域で多少の無理を言うには、成果よりも信頼が何倍も必要と痛感。電話をし、会いに行き、時には酒を飲み、関わり続ける日々の積み重ねの上で、「やってみようことがあるんだけど、どう思いますか？」と、相手に投げかける。地域の想いや願いを汲みながら、実現に向けて県や国との調整までしようとするところが大野さんの強みだ。

島の教育魅力化を進めるキーパーソン

コーディネーターは、多様な人びとを繋ぎ、世の中の動きを捉え、地域・高校の魅力化を形にしていける存在です。人によって様々な得意分野がありますが、大野さんはプロデューサー的ですね。ビジョンづくり、組織づくりには欠かせない存在でしょう。みんなの声に耳を傾け、現場の声に輪郭をもたせて島前3町村長や県に届け、議論リードしながら、実現への可能性をみせてくれます。この島での教育の変化が、世界の教育を変えようという気概が伝わってきます。大きな目標に向かうその姿が、地域や組織の小さな違いを乗り越えさせ、島内外の多様な人びとを巻き込んでいるのでしょう。



海士町長 大江和彦

大野さんたちとよく話すのは、この挑戦は「思い出づくり」なんだということ。どうせやるなら大きいほうがいいし、失敗してもいい、多くの人を巻き込んで、最後に笑いあえたら最高だ、と。大野さんたちと共にチャレンジをし続けるこの町の雰囲気をつくっているところだ。

首都圏の大学や企業と地方の高校をつなぐ

#産学官連携 #キャリア教育



本宮理恵
motomiya rie

奥出雲町教育魅力化コーディネーター
一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム

島根県出身。大学卒業後(株)リクルートに入社し、2011年に安来市にUターン。その後、江津市にて創業支援、地域活性、人材育成を担うNPO法人の設立に携わり、同法人は地域再生大賞受賞。2014年、奥出雲町の高校魅力化コーディネーターに着任。NPO法人手ごねと石見 理事。(株)MYTURN 代表。

※しまね留学とは、県外に住んでいる意欲ある中学生が、島根県の高校を受検し、入学し、島根県で充実した高校3年間をおくること。現在、島根県では19の県立高校で、全国から意欲ある入学生を募集しています。

本宮さんはNPO法人での経験を買われて、高校生が地元の特産品の製造・販売する産学官連携プログラムの運営を任せられた。地元企業との関係構築や、関東の事業所開拓を担当するなかで、高校生の活躍に対する企業や町の期待を感じたという。また、山間部の高校生は人間関係が固定化しやすい。起業家を高校に招いた授業や、地域課題研究の青山学院大学での発表、短期海外留学プログラムなど、生徒にとって刺激となる機会をつくってきた。

コーディネーターの地域を越えたネットワークづくり

#共学共創 #チームしまね

着任した当初、島根県内のコーディネーターは十数人。「校内体制や町との連携など、多くの悩みを1人で抱えず、他校の取組を学び、一緒に考える仲間が欲しかった」と本宮さんはいふ。2015年の研修会を契機に、各高校の視察合宿を数回開催。どんな教育環境が必要なのか、県単位で何ができるのかといったテーマで夜遅くまで語り合った。そこから生まれた意見がもとになり、県のしまね留学※のホームページや人材募集イベントなどに繋がっている。



各地域のコーディネーターが一堂に集まり、地域と連携したプログラムや公営塾の取り組みについて学び合う。

伝わる・伝える翻訳者がいることの大切さ

山間部の小さな高校ですが、コーディネーターの動きによって、都市部の大学との連携、海外派遣事業など、生徒たちの成長機会につながっています。また、幼小中高が一体となって魅力ある教育環境づくりを目指していますが、小中と異なり、設置者が違う県立高校と町の関係構築は、目指す方向性は同じでも、施策の整理や優先順位など粘り強い議論が必要です。コーディネーターは双方の間に立ち、翻訳してくれる存在となっています。



奥出雲町 教育長 塔村俊介

熱い地元愛が島を動かす

#事業のマネジメント #コーディネーター業をつくる

地元の大崎海星高校が存続の危機だと知ったのは、一日の終わりに地域の若者と島の将来について話をしていた時だった。島の未来を考えると、いてもたってもいられず、次の日から動き出した。役場や高校には想いを持った人は多く、その人々を繋げて、奇跡のようなスピードで魅力化の動きが始まった。現在は7名のスタッフと越境的なチームを組んで活動中だ。全国からの生徒募集、公営塾の運営支援、組織間の調整等をコーディネーターとしてバックアップしている。「コーディネーターの価値は、魅力化に関わる多様な関係者を繋ぐこと」と取釜さんはいふ。学校・公営塾・行政のどこにも属さず、思いを翻訳して繋げていくことで、関係者の主体性を引き出すことを大切にしている。そういった流れのなかで、大崎上島町は施策の最重要事項として「教育の島」構想を掲げ、今年からは役場の中に「教育の島推進室」を設置し、島ぐるみで教育に力を入れ始めている。



全国から生徒募集をしている学校が集まる「地域みらい留学フェスタ」。他の学校の多くは教員主体であったが、生徒主体で大人を巻き込み募集活動をしていた。

地元出身のコーディネーターの価値

#地域の人脈 #地方の人材不足

「島にどんな人がいるかはほぼ把握しているので、繋ぎやすい」事情を理解した上で、地域の様々な声が集まる窓口になれるのは生まれ育った場所だからこそ。魅力化の柱となる地域を生かした教育内容のカリキュラムづくりに、地元出身者の強みを生かして、最適な形で教員と地元企業・生産者・住民を繋ぎ、流れを作る。中高の教員免許を持ち、将来の夢が先生であったが、「僕にとっては、教員よりも自由な立場で関わられるコーディネーターが面白い」と今はいふ。魅力的な教育をつくる起爆剤として、地元出身コーディネーターが増えていく未来を描く。



取釜宏行

torikama hiroyuki
大崎海星高校魅力化推進コーディネーター
株式会社しまのみらい 代表

大崎上島町出身。大学卒業後、東京でITベンチャー、京都で塾開設に関わり、2011年にUターン。私塾を始める。2014年株式会社化。2016年度より大崎海星高校魅力化推進コーディネーター。私塾で取り組んでいる島の担い手を育成する「島キャリア」は2016年度キッズデザイン賞受賞。



中村 純二

nakamura junji
津和野町教育コーディネーター
一般社団法人ツワモノ代表
厨ファミリア 代表

石川県出身。大学卒業後、埼玉県と東京都で小中学校の教員として勤務。青年海外協力隊としてマダガスカルで教員養成プロジェクトに取り組む。2013年より津和野高校の高校魅力化コーディネーターとして赴任。2016年に一般社団法人ツワモノを設立し、津和野町の教育コーディネート業務を請け負う。

学校を地域に開いていく #多様な価値観を学校に取り入れる #現場主義

中村さんが津和野町に来ることを決めたのは、地域からの要請と自分の教員時代に感じていた問題意識からだった。閉鎖性や同質性の強い日本の学校教育への疑問を感じている中、青年海外協力隊として派遣されたマダガスカルで学んだ「学校と社会の接続」の大切さの実践ができる場所として、変革ニーズのあった津和野町を選んだ。

一年目は手探りの中で、生徒募集に向けた情報発信からスタート。同時に、学校の外と学校を繋ぎながら、核となる教育プログラムづくりに着手。学校に多様な価値観をもたらすために、東京から大学生を招いた授業や、地域を舞台にしたイベントや町営塾の開設を手掛けた。「人や物をつなぐことはコーディネーターの大切な仕事」という中村さんは、いかに学校を外に開くかを大切に、生徒の成長はもちろん、学校全体の教育力を引き上げ、閉鎖的になりがちな学校文化に変容をもたらす。

地方の教育で起業する #仕事をつくる #ロールモデル

高校でコーディネーターを4年間務めた後、起業。今度は津和野町全体の教育に携わるコーディネーターとして町から業務を請け負っている。保小中高と、校種の壁を超えて「タテの連携」を作るべく、小中学校の現場にも入り、今年は幼児教育も手がけている。

「自分が起業する事で、高校生だけでなく町の人や同僚にも地方で仕事を生み出せることを示せるんじゃないか。」と、自ら挑戦する姿勢でいることを意識する。新しい現場に飛び込み、人や情報をつなぎ、選択肢を生み出す。教育の現場で0から1を作り続けている。



水害で列車が来なくなった駅のホームで、町民への声援と線路の復旧を願い、高校生主催の「駅のステージ」を開催。町民約70名が集まり、復旧への想いを新たにしました。



奥田 麻依子

okuda maiko
元隠岐島前高校魅力化コーディネーター
軽井沢風越学園設立準備財団
まち・ひと・しごと創生委員

1986年生まれ。岡山県倉敷市出身。京都大学教育学部卒業。IT企業勤務を経て、2012年より隠岐島前高校魅力化コーディネーターに着任し、6年間、地域総がかりの教育改革と持続可能な地域づくりに取り組む。現在は軽井沢風越学園設立準備財団で学校と地域を繋ぐ教員を目指し活動中。

新しいカリキュラムの開発に挑戦

#カリキュラムマネジメント #ファシリテーション

奥田さんはコーディネーターとして隠岐島前高校で、保健・家庭科・情報・総合的な学習の時間を特例的に統合した「地域生活学」を始めとしたカリキュラムの開発・運営に参画。教員の教科の専門的な立場からの意見や実現に向けた不安を拾い、制度的に可能なことを文科省から出向していたコーディネーターと確認しながら調整を進めた。不安材料を丁寧に取り除くことで、先生たちが本当はやりたかったことを話し出す。相手の想いをくみ取り、場をファシリテートする奥田さん。不可能と思われた改革を滑らかに実現させた。

コーディネーターから教員へ

#ネクストキャリア #チーム学校

隠岐島前高校での6年間のコーディネーター経験を経て、長野県軽井沢町に設立予定の軽井沢風越学園で教員となる道を選んだ奥田さん。今度は先生として、生徒の成長を一番近くで見つめながら、学校と地域を繋いでいく。

「コーディネーターをやって教育観が変わりました。先生だって1人で全部できなくていい、大人もチームで向き合えばいいんです、共に場をつくり、その中で生徒の変化を実感することで大人たちも変化し、大きな力になっていく。「多文化協働」を理想に掲げ、奥田さんの新たな挑戦が始まる。



第15回「まち・ひと・しごと創生会議」に参加。首相も参加する会議で地方教育の現場の声と可能性を積極的に伝えている。(奥田さんは左列の最奥) (出典：首相官邸ホームページ)

様々な角度から、 学校と生徒を支える

学校の運営に組織として関わる

#居場所づくり #チームマネジメント

原発事故により福島県双葉郡の5つの高校が休校するなか、今後の地域の教育を担うべく福島県立ふたば未来学園高校は2015年に開校した。地域の未来をつくるリーダーを育てることを掲げ、地域・企業・NPOと協働した新しい教育モデルづくりに挑戦している。一方で、震災で心に傷を負った生徒たちが多いことも事実。そこに現れたのが長谷川さんだった。

単身で福島に通い教員との信頼関係を築き、2017年4月に認定NPO法人カタリバとしてチームで入り、コラボ・スクール「双葉みらいラボ」を立ち上げた。カタリバは既に宮城県女川町や岩手県大槌町にコラボ・スクールを展開。ノウハウを生かし「生徒が自分らしく過ごせる居場所」として自習や交流のスペースを設置し、自身のキャリアを考えるイベントや地域と生徒とを繋ぐイベントなども実施している。教室ではない場所だからこそ見えてくる生徒の様子や本音は、チームとしてその情報を拾い上げ、学校と連携しながら、日々のより良い活動施策に活かしている。

2・3年の授業「未来創造探究」では「原子力防災」「アグリ・ビジネス」等6つのテーマに分かれ地域課題の解決に取り組む。ここにもカタリバがチームで関わり、計画の段階から教員と協働し、生徒の課題意識を育てていく対話型の授業を行っている。長谷川さんは学習コーディネーターとして、授業の指針となる「未来創造探究ノート」の制作を教員と共に開発。学校全体のカリキュラムに関わる人材育成要件・ルーブリックの運用にも深く関わる。拠点長としてカタリバのスタッフやインターン約7名をマネジメントしながら、様々な教員・地域と協働する長谷川さんは学校経営のキーパーソンといえる存在だ。

事業の拡大をマネジメント

#組織の強み #スケールアウト

長谷川さんは福島県教育委員会の復興教育アドバイザーとして県全体の教育にも携わる。ふたば未来学園の実践を福島全体に広げていこうと模索中だ。そのためコラボ・スクールの運営と探究学習支援の業務は、チーム体制と共に明確に分け、事業ごとのニーズに合わせて、他校でも展開できる体制を目指している。

組織として関わることで、人材の多彩さや各拠点でのノウハウを共有・活用してマネジメントをすることができ、バックオフィス業務を担うことで、事業を柔軟に軽やかに拡大していける強みがある。

共に汗をかく仲間がいる安心感

絶妙、その一言に尽きます。震災を体験し一歩を踏み出せずにいる生徒とどんな探究授業をすればいいか教員たちも悩んでいました。外部の団体に対する拒否感もあったのですが、長谷川さんは先生方と話し、相談に乗りながら、自然と学校に溶け込んでいきました。

カタリバのメンバーが先生と協働して探究授業に関わり始め、質がかなり上がりました。対話が生まれ、生徒の素朴な関心がメタ認知を通じ確かな問題意識に昇華されています。

放課後の居場所も、新しい取り組みで不安な声も上がるなか、教室外での生徒とのコミュニケーションを通じて生徒の本音が見え、私たちもその価値に気づきました。きめ細やかな対応で組織としてキチンと教員と情報を共有してくれるのでこちらも安心感を持って共に生徒と向き合うことができている。2019年度から新校舎となり、中学や地域との繋がりをより強くするため、カタリバと手を取り進めています。



福島県立ふたば未来学園高校 校長 丹野 純一



長谷川 勇紀

hasegawa yuki

認定NPO法人カタリバ
コラボ・スクール 双葉みらいラボ 拠点長
福島県立ふたば未来学園高等学校 学習コーディネーター

新潟市出身。東京学芸大学卒業後、株式会社セルムにて大手企業の人材開発に従事。2014年NPOカタリバに転職。キャリア学習プログラム「カタリ場」の首都圏事業責任者として活動。2017年4月からは福島県双葉郡にてコラボ・スクール「双葉みらいラボ」を立ち上げ、拠点長に従事すると共に、福島県立ふたば未来学園高校で学習コーディネーターとして教育の魅力化に取り組む。



放課後には気になる生徒とも面談。生徒の声も重要な財産。ただ話を聞くだけでなく、今後に使えるツールの試行も行う。

先生とのコミュニケーションは積極的にとる。情報交換を丁寧に行い、学校内の情報格差をなくし、チーム作りをしていく。

よくあるスケジュール

9:30	10:30	11:30	12	13	13:45	15:35	20	20:30	21:30	24
起床 出勤	通勤	朝礼 事務	昼休み	先生方との 打合せ	双葉 未来 創造 探究 の 授業	みらい ラボ の 運営	終礼	帰宅	夕食	就寝



「未来創造探究」では、先生と一緒に生徒と向き合う。先生の個性や主体性を引き出しつつ、生徒にとって良い学びを作るため、日々試行錯誤。



「放課後と授業の両方で関わられることに非常に価値を感じています」と長谷川さんは言う。ここには日々多くの生徒が訪れている。